

秦淮に泊す

杜と

牧ほく

煙は寒水籠め月沙を籠む  
夜秦淮泊して酒家に近し

高女は知らず亡国の恨  
江隔てて猶唱う後庭花

【作者】杜 牧(八〇三〜八五二年)・晩唐の詩人。字は牧之「ぼくし」、号は樊川「はんせん」、陝西省長安県の人。名家の出身にして八二八年進士

に及第後、地方、中央の官を歴任し中書舎人ちゆうしよしゃじん)となつて没す。資性剛直、容姿美しく歌舞を好み、青楼に浮名を流したこともあつた。樊川文集二十卷、樊川詩集七卷あり、阿房宮賦「あほうきゆうふ」は早年の作にして文名を高めた。年五十歳。

【語釈】\*秦 淮:南京の近くを流れる川の名 秦代に開かれた運河 長江に注ぐ 兩岸には酒樓多く、今に至るまで風流繁華の地 \*寒 水:

さむざむとした河で秦淮河をさす \*商 女:酒樓の歌姫 \*亡國恨:南朝最後の陳王朝でその滅亡の悲哀 \*後庭花:陳の後

主叔宝(こうしゆしゆくほう)が 玉樹後庭花という曲を作り 歌舞音曲にふけりついに隋に亡ぼされる 故に亡國のうたといわれる。

【通釈】夜霧が寒々とした水面にたちこめ、月の光は川辺の沙をつつみこむように照らしている。今宵六朝(りくちよう)以来の名高い繁華の地である秦淮河に舟をとめて一泊したが、そこは酒樓の近くにあつた。ふと聞けば歌妓(かぎ)・歌姫(かぎ)たちは、かの陳王朝の亡國の悲哀など知るはずもなく、江を隔てた(酒樓)あたりでは今も「玉樹後庭花」が歌われているではないか。